

称数法授業ノート

櫻田芳樹

Received October 20, 1990

はじめに

物の数を数えるということは、人類が文字をもつ以前に始まり、原始文字をもったごく初期からその表記も工夫されてきた。その古い文化の流れの上に、それぞれの言語の称数法と表記がある。生活文化の基本事項である称数法は、どの語学を学ぶにも、初級段階でそれを与えられるが、一般に与えられた数の数え方を丸暗記することですまされていよう。私は中学生の日に初めて英語の称数法に接して、eleven, twelveの異質性に首をひねりtwentyone, twentytwo, まできてやっと安心したことを思い出す。今にして思えば、日本語の称数法との対比で英語の称数法を見ていたということであろう。

その後、大学で20進法・60進法の痕跡を残すフランス語の特異な称数法(例えば、71〈soixante dix 60+11〉80〈quatre vingts 4×20〉91〈quatre vingts - dix 4×20+11〉)に接したり、文字学の講義を受けたりして、断続的ではあるが意識的に数表記と称数法の差異について考えてきた。中国で日本語を教えた折には、日本語(和語)と漢語の称数法の関係を意識化させることで、日本語の中の漢語の占める位置を説明した。いま、英米語科の学生に中国語を教える折りなど、英語・日本語・中国語のそれについて対比を示すことを試みている。いずれも私の語学教育生活を通じて生じた観念連合の結果であるが、「思いつく言葉通り、その多くは、数学史、科学史、天文暦法の入門書にはそれぞれ明解に書かれていることばかりである。ただ、語学教育にそれらの知見が生かされることが少ないことことからすれば、大学の語学教育において、諸語の数表記、称数法の普遍的側面と差異について示し、私達の日常触れている称数法の諸相を整理してみることは多少の意義があると思う。以下はそのためのノートである。

I 日本語の称数法

I-1 日本語の称数法は漢語であること

現代日本語の1~10までの称数法には「いち・にい・さん・しい・ごう・ろく・しち・はち・くう・じゅう」の漢語系の称数法と固有日本語である「ひと・ふた・み・よ・いつ・む・なな・や・ここ・とお」の和語系の称数法が並存している。日本語本来の称数法はこれまでに、10以上の称数法は消えてしまい、わずかに二十日(はつか)、二十歳(はたち)晦日(みそか)、三十一文字(みそひともじ)、八百屋(やおや)などにその痕跡を残しているのみである。

* 外国語学部

Faculty of Foreign Languages

まだ十二分に日本語の称数法が固まらぬうちに圧倒的に整った中古漢語の称数法がその漢字表記とともに日本に入ったため、その後11以上の和語系の称数法は姿を消して、基本数詞の1~10のみが、外来語としての漢語系列の称数法と並存して生き残ったのである。

現在、学生一般には、漢語・和語の並存はふつう、漢字語彙の音読み、訓読み程度にしか意識されておらず、外来語・固有語の並存という面は忘れられていることが多い。従って、現代漢語の「yī èr sān sì wǔ liù qī bā jiǔ shí」を教えて、「いち、にい、さん、しい、ごう、ろく、しち、はち、くう、じゅう」を対比してもその同一語源であることは意識されない。それは理屈の上で知っているはずでも、日本語の漢語系列の称数法が中古漢語の日本的化石化であるのに対して、現代漢語のそれはその後の音韻変化を遂げた形で、一見その類似は三(san, さん)ぐらいにしか見出せないためでもある。そこで以前なら和語と漢語の固有語と外来語の側面を確認して、それが同一語原であることを説明したが、近頃は藤堂明保編「学研漢和大事典」には、字音の名条に音韻変化のあとが示されているので、これを示せば、実感の伴った理解が得られよう。(注1)

	上古		中古		中世		現代
一	iet	—	iě̃t	—	íəi	—	i (yī)
二	nier	—	nii (rii)	—	ri	—	rr (èr)
三	sam	—	sam	—	sam	—	san (sān)
四	sied	—	sii	—	sī	—	sī (sì)
五	ɲag	—	ŋo	—	u	—	u (wǔ)
六	liok	—	liuk	—	liau	—	liau (liù)
七	ts'iet	—	ts'iě̃t	—	ts'íəi	—	ts'í (qī)
八	puāt	—	puAt	—	pa	—	pa (bā)
九	kiog	—	kiəu	—	kiəu	—	tšiau (jiǔ)
十	dhiəp	—	ʒiəp	—	Srəi	—	sī (shí)
百	pāk	—	pAk	<	pai	—	pai (bǎi)
千	ts'en	—	ts'en	—	po	—	po (bó)
万	muǎn	—	muAn (mbiuAn)	—	ts'ien	—	tš'ian (qiān)
		—		—	wan	—	uan (wàn)

中古漢語音を縦にたどり、「p, t, k」の入声音の存在と、それが日本人の発音にかかるCV音節化して、「ti」「tu」「ku」のようになり、「p」は「ジフ」のように「フ」となることを言えば、現代日本語の漢語系列の称数法が中古漢語の化石化として明示される。そしてこの発音を用いて中国語の十進法、万進法に従って、十、百、千、万…の桁にそれぞれ一、二、三…九を直接くっつけてとなえているのが、現代日本語の称数法である。ただ10までの基本数詞のみは固有語の称数法が残ったが、それは称数法全体からすれば殆ど痕跡程度にすぎない。

I-2 消えた日本語の称数法

そこで現代日本語には消えてしまった11以上の称数法はどんなものであったかを端的に示

すには、高校生時代に誰もが触れた「土佐日記」の冒頭を示せばよい。

をとこもすなる日記といふものを、をんなもしてみむとてするなり。

それのとしの、しはすの、はつかあまり、ひとひのひの、いぬのときにかどです。(注2)

21日という日数を数えて「はつかあまりひとひ」といえば、11日以上は「とをあまりひとひ」と「10位数-あまり-1位数」の称数法であったと類推できる。ただ、翌日の日記の日付けは「二十二日」と漢字表記され、この方は漢語系列の称数法で読むべきことが、萩谷朴先生によって主張されている。

つまり、序章の「はつかあまりひとひ」という本文が日付の表記ではなく、日数の計算に過ぎないことと、文章語としても音読以外に訓み方のない「元日」という本文の存在によって、すべてを国語として和訓せよと主張する根拠は消滅したことになる。ただし、漢字表記のものをすべて音読するのではなく一日(ついたち)二日(ふつか)三日(みっか)四日(よっか)五日(いつか)六日(むいか)七日(なにか)九日(ここぬか)十日(とをか)十四日(じふよつか)廿日(はつか)廿四(にじふよつか)卅日(みそか)等をまじえた音訓折衷のきわめて平俗なよみ方が適当すると考えるのである。(「土佐日記全注釈」P53~54)

とすると、貫之の時代には日数を数えるには和語、日付を数えるには現代日本語と殆ど同じ称数法(卅日を除く)が成立していたことになる。その音訓折衷とは、暦日のとなえ方に残った和漢混在の姿であり、和語の生き残り方の姿でもある。基本数詞の1~10, 20, と10以上の数にからむ4が生命力が強いといえようか。

それは言い換えれば、10以上は漢語系列の称数法にとって代わられたものが、20日、30日にまた14日、24日の4に和語の称数法の痕跡を止めているものといえよう。やがて暦法の変化に伴って卅日(みそか)も30日(さんじゅうにち)の漢語に席を空け渡して月末の意に落ち着けば、これは現代日本語の日付のとなえ方と完全に一致する。

日付と日数は現代漢語では「一号、二号、三号(文章語では一日、二日、三日も)」と「一天、两天、三天」と明確に区分されるが「土佐日記」の使い分けは現代までは残らずその日付の数え方が日数の数え方と重なる結果となった。ただ1日(ついたち)だけはtukitatiの音便、月の初めの意であるため、別に1日(いちにち)の漢語が席を占めている。

「土佐日記」に残っていた和語系列の11以上の称数法を、更に「古事記」(注3)に遡ってみると。

十二神(とをまりふたはしら) 壹拾肆嶋(とをまりよしま) 十六神(とおまりむはしら) 參拾五神(みそちまりいつはしら) 肆拾伍歳(よそちまりいつとせ) 肆拾玖歳(よそちまりここのとせ) 伍拾漆歳(いそちまりななとせ) 玖拾參歳(ここのそちまりみとせ) 壹佰陸歳(ももまりむとせ) 壹百貳拾參歳(ももあまりはたちまりみとせ) 壹佰參拾漆歳(ももちまりみそちまりななとせ) など、
神の数、鳥の数、天皇の年令を数えたものが、漢数字表記の訓みとして拾われる。

太安万侶は数表記にあたって唐代に流行した繁体の仮借数字をまじえた表記を用い、和語の音を示すような表記をとっていない。^(注4)ここに示した訓みは、倉野憲司氏のそれであるが、これらは宣長以来の古語の研究に立つ復原であって、「土佐日記」の日付けのように已に漢語系例の読みが浸透していたかも知れないとの疑いもたれうる。

しかし、それは「各纏持八尺勾瓏之五百津之美須麻流之珠而」(各八尺の勾瓏の五百津(いほつ)の美須麻流の珠を纏き持ちて) (「古事記」P74) のような表記を見れば、やはり和語で読まれていたものと思う。それが漢語表記のそのものをめざした「日本書記」では「八坂之瓏之五百箇御統」と記されるのとは対比してみれば明らかである。^(注5)

すると「古事記」の称数法は、10(とを) 20(はたち) 30(みそぢ) 40(よそぢ) 50(いそぢ) 60(むそぢ) 70(ななそぢ) 100(もも、又はももち) であり11以上99までは、「10位数-まり-1位数」100を超えると「ももあまり-10位数-まり-1位数」または「ももち-まり-10位数-まり-1位数」のようにならえていたと帰納される。20以上の数につく「ち」又は「ぢ」は「一つ、二つ」の「つ」に同じく漢語の「箇」にあたる。

このように位どりの変わり目毎に「あまり」なり、その短縮形「まり」なりを入れて称える称数法の前に、十進法、万進法により十、百、千、万と位取りが進むごとに下位数をそのまま下接する漢語のような簡潔な称数法が出現すれば、その表記を借りた以上、いずれ日本語固有の称数法にとって変わるのは自然の勢いであった。

同じ文化的条件下にあった朝鮮語では1~99までは固有語と漢語の称数法が並存していて、100以上は漢語称数法が使われる。それは朝鮮固有語の称数法が10以上になっても日本語のように「あまり」などを下接しない数え方であったため、並存の幅が日本語より少し広がっている。

ただ、和語のような不自由な称数法に類似の発想は、漢語にもなかったことではない。

疾氏錫之邑二百又九十又九邑。(齊子仲姜罇, 210)

筭三百有六旬有六日。(書、堯典)(周法高「古代語法」p269)

これは中国古代の例だが、言い回しレトリックとしては「十有五年」のような表現として近代にまで残ってゆく。ただ漢語のこうした称数法は平行現象であって、称数法の主流ではない。また、英語のeleven, twelveの異質性は英語におけるこうした発想の名残であった。

eleven [OE *ellefne*, *endl̥e ofan* (cog. G. *elf* (<OHG *einlif*) <Gme *einlif* (ain-one + -lif left+behind))=(原義)10かぞえて残り1]

twelve [OE *twelf* (cog. G. *zwölf*) <Gme *twā-two* + -lif left behind: (原義)「10数えて残り2」^(注6)

これは、和語の「あまり」の発想の方に近く、525をfive hundred and twenty fiveのようという「and」や、仏語の21, 31, 41, 51, 61, 71などに残る「et」(例えば21 *ving et un*)は漢語の「又・有」に近いであろう。

上にあげた「古事記」の100以上の数はいずれも天皇の寿命で(106歳孝霊, 123歳孝安, 137歳神武), これ以上の数で「古事記」に見えるのは、神代七代の終わりに、「日子穗穗手見命者坐高千穗宮、伍佰捌拾歳。(いほまりやそとせ)」と、神として例外が見える他、い

ずれも大数をもって数の多いことを言う例で、実際の数を表そうとするものではない。そうした例として500, 1000, 1500, 8000, 8000000が見える。

五百引石(いほびきのいは), 長五百秋, 絞殺千頭(ちかしらをくびりころさむ), 千人(ちたり) 千五百之黄泉軍(ちいほのよもついくさ), 千五百人, 千五百産屋(ちいほのうぶや) 八千矛神(やちほこのかみ), 八百萬神(やほよろずのかみ)

日本語では「八尋殿」(やひろどの)「八衢」(やちまた)「八拳須」(やつかひげ)など聖数八が多数を代表し, それが拡大すると「八十垺手」(やそくまで), 「百八十神」(ももやそがみ)のようになり, 更に「八千矛」「八百萬」のように拡大した。五百(いほ), 千(ち), 千五百(ちいほ)は実数の百を多数の代表としたものが, 5, 10の単位で拡大したものである。

以上消えた和語の称数法は具体数としては百数十ぐらいまで, それ以上は, 5, 8, 10, 100, を単位の基礎として拡大したものが見られた。その目で見れば580歳という日子穂穂手見命の寿命も $5 \times 100 + 80$ にその誇張法を見られよう。

漢字の成立期に殷の人々は千, 万の具体数を数えたが, 日本語はその必要が100をいくらかも出ない所で漢語の整齐的な称数法に出会い, 初めは表記を借りるうちに10以上の称数法そのものが消えてしまったのである。

II 漢数字とその他の数字

II-1 一, 二, 三, 1・2・3の原始性

私達が日常生活で接する数字はアラビア数字, 漢数字, ローマ数字であろう。私は現代漢語称数法授業において, この三つの数字を並行して示し, その性質の読みとりを促してきた。

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

漢数字とローマ数字の1~3の発想法の類似はすぐにみてとれる。縦横の違いはあるものの, 直線の積み重ねであり, アラビア数字は1にだけその原始性があると, 学生には言ってきたのだが, 後に人類初得の数観念からいってアラビア数字の, 2, 3は漢数字の草書体, 続け書きのようなものではないかと思うようになった。その後出会ったD・E・スミス, J・ギンスバークの「数と数え方」には明解にその跡が示されていた。

「二」は一般に二本の指 || か二本の横線二で表された。|| を早く書くとUのようになりませんが, アラビア人やペルシヤ人が使った数字Uは, これから出ています。また二, は早く書くとZとなり, これが私たちの2に発展しました。

「三」は, ふつう三本の垂直線 ||| で表わしましたが, 極東の中国や日本のよう

に水平線三のこともありました。ある種のペンが使われだすと、三本の線をつないでヨのようになりました。これが3のおこりです。

同様にⅢを早く書いてμのような形も使われました。これが結局、イラン(ペルシヤ)人やアラビア人のμとなり、今日でも幾百万の人々が使っています。ところで、この文字を九十度回転しますと、3となりませんが、おもしろいことに、これがインドの東部地方の大部分では、三の数字を表しています。サンスクリットの3やそれに似た多くの形がこの地方に見出だされるのです。(注7)

初期のエジプト数字は1~9までを縦線の数字で、バビロニアの楔形数では楔の数で表している。これが一番原始的発想の数字で、私達が日常ふれている三種の数字の1~3までは、この発想の表記が残ったことになる。1~3までに原始的発想が残っているのは、人類初得の数観念が3までであったことに由来する。丁山「數名古誼」は、その中国の数観念の原初段階を述べて次のように言う。

夫艸味之世，人知陋索，凡一二所不能畫者，每每約知以三，易曰“利市三倍”論語曰“三思而後行”孟子曰“食李三咽”史記“三仕三見，三戰三走”皆以三見其多，蓋上世之遺。數目之語雖甚古而上世紀數之術，每以二爲偶進而以三示多：多而無別，則不足弭多寡之較也，于是有四五六七八九十；(注8)

同じことを「数と数字」では、文化人類学の調査を引いて次のように言う。

人々が数やいわゆる「数字」の使い方を学ぶには幾千年もかかりました。そして人間の文明がはじまってからも長いあいだ、必要な数と言えば二や三などの簡素な数だけでした。大きな数の場合には私たちが「たくさん」(lots)の人、「どっさり」(heap)のリンゴ、魚の群れ(school)。ひつじの「むれ」(flock)というような表現に相当するさまざまなことばが用いられました。たとえば、オーストラリアの三十種の部族語を調べてみますと、四以上の数は出てきませんでした。これらの部族語の多くは、ただ一と二だけに名称がついて、それ以上の数は単に「多く」とか「たくさん」と表現するだけでした。(「数と数字」P11)

幼児が「沢山ちょうだい」の意で「三つちょうだい」という例なども、人間がその発展段階をたどっているものと見られる。その素朴な原始観念の反影が三種の数字の1~3の直線表記であった。

そこでこの直線の表記は何に由来するかというに、「数と数字」では、二本の縦線Ⅱを「二本の指」と見、数字(digits)の語源がラテン語(digiti)「指」にあることを述べ10進数の起源を二本の手に見ている。(同P11)

郭沫若もローマ数字をそのようなものと見て、更に漢字の一 二 三 三 (契文、金文には四を三と書く)をも手指の象形とみている。西洋人は左手の小指から順に薬指、中指、人差し指と両手を開く数え方によって縦画Ⅰ Ⅱ Ⅲが生まれ、Ⅴは片手の象形、6以上は左手に添えて更に右手を小指から立てていき、10は二本の手を表示して×となり、Ⅳ、Ⅸはそれぞれ片手マイナス1、両手マイナス1と見る。いわば、Ⅳ、Ⅸ、Ⅹ、を漢字にいう指示文字、

他を象形文字として見ている。それに対して横に倒されて示される一から四までの漢数字は、右手で親指から人差し指、中指、薬指と折って数える数え方によるという。^(注9)

「数と数字」(P18)には漢数字と同様、ローマ数字IVにもIIIの表記があったことが紹介されている。これによると、ローマ数字の減法による表示IV, IXは後出のものであろう。すると、これは中国の算木による数表示「一 二 三 三 三 丁 卅 卌 卍」の発想に非常に近いものであった。

ローマ数字が減法表示を含みつつ、手指による象形に由来するとすれば、これが三種の中で一番原始的な数字で、漢数字は四以後、ようやく繁雑化する直線表示を他の同音字などを仮借して数字を文字化して示したもの、アラビア数字は、2,3の草書化とは別に、四以上も一筆で書きうるような記号を工夫したものである。近代に入って、漢字文化圏では西洋の数学の伝播にともなって、この数字を取り入れ、すぐれた記号性によって、数の生活の主役を担うことになった。

しかし、漢字文化圏ではローマ数字的繁雑さを文字化によって止揚した漢数字の表記があって、それは文章表記の中に厳然と残る一方、その簡潔な称数法によってアラビア数字をも読んでいるわけである。

II-2 漢数字の原義

郭沫若はローマ数字の成立と対比して漢数字の横畫は指を折って数えることによると見た。しかし、同じ指をもって数えるとも見ても、その横畫をを単なる習慣として有意性を見ない説、また横畫を算木による法則化と見る説もあって、文字学は初級者に提示できるようには定論を得ていない。

私ハ一カラ十マデノ数ヲ示スニハ、文字ヲ用ヒナイ最古ハ言フマデモナク、タトヘ文字ヲ用ヒルヤウニナツテモ便宜的ニ手ヲ用ヒタト思フ。手ヲ用ユルニシテモ種々ノ方法ガアツタカモ知レヌガ、私ハ漢字ノ数ヲ示ス音カラ考ヘテ、右ノ片手ノ指ヲ用ヒタト思フ……先ヅ第一着手トシテ「一」ノ字ニ就テ言フト、コレハ人差シ指一本ヲ突き出シテ数ノ「一」ヲ表示シタト思フ。ソレヲ書ク場合ニハ、縦ニ「I」ト書カナイデ横ニ書イタ。コレハ契文ニ既ニ見エテイルカラ、今日吾々ノ見得ル最古カラノコトデアル。(加藤常賢「漢字ノ起源(一)」^(注10))

おそらく原初の時代には、物の数え方はそれぞれ具体的事物に即して便宜な方法がとられていたであろうが、これを文字として表記するときには、一定の法則化が試みられたであろう。たとえば、横畫を一、縦畫を十とするなどは算木による法則化であったと見られる。十位数を示すときに廿・卅・卌のように表記することは卜文金文に多く見られるところであるが、これも算木による表示法に由来すると考えられる。エジプトの神聖文字では九までは直線をその数だけ並べて表記し、十は假借字を以て表記する。直線は牛を数える時の算木である。(白川静「説文新義」卷一)^(注11)

数觀念の発達指を用いて数えるということから始まったという古代的事実、また、それを裏付ける文化人類学の報告、一方エジプト神聖文字が算木表示であったり、卜文、金文にみられる廿、卅などの表示に照らしてみると、いずれも一理ある説で、その当否を速断できない。従って、漢数字の原義にも、文字学者によって異論があるが、今の所四以上の仮借字についてもそれが

何故数詞に仮借されたものかを追及しようとしている点で、加藤常賢「漢字ノ起源(一)」の説が一番当面の間に答えてくれる。授業に示しうる形で、その結論のみを略記しておく。

- 一 字形は人差し指一本。「イツ」(於膝反)の音は人差し指を突き出した所からきた。鋭出の義の同形の音としては「キツ」聿(イツ)肄(イツ)をあげる。
- 二 「一」を二つ積み重ねた形。「二」「ジ」の音は「一」に更に一を積み重ねたところから「績」(古音シ)の音が変わったもの。
- 三 「一」を三つ重ねた形。人差し指・中指・薬指を突き出した形。「サン」の音は「人の三を衆となす」(国語周語)の「衆」・「多い」の意味からきた。「攢は叢なり」(楚辭、王逸注)、「攢は聚なり」(説文)
- 四 口中から八字形に氣息の下垂する形。𠄎の原字で、四が専ら数詞に用いられるようになって𠄎字が出来た。(丁山説)「シ」の音は「一」にしる、指にしる、四本を「陳べた」所から来ていて、陳列の意の「肆」字を四に代用するのは四の音の原意。
- 五 (𠄎)「絲巻き」の形。「ゴ」の音は「×」字の形に片手で綾取って糸を交互させた所から来ている。数詞本来の音ではないが、「×」字形に綾取ったのが五本の指の片手だから数の五ヲ「ゴ」音で呼んだ。
- 六 (𠄎)家屋の形象。「屋」音の字。片手五指を並べて示した五を、六にいたって全部握って「コブシ」を作って六を表した。「握」と同音の「屋」を借りて数詞の六とした
- 七 七は契・金文には現在の十のように書き、一を真中から切断するように丨を加えた。「切」の原字。(丁山説)片手を握った状態から人指し指一本を出してこれを折りまげて表した。「七」はこの「切」の音を借りた。
- 八 両側に分れて其間にすきまのあることを示す字。(説文の説)五本の指の中三本を折って、親指と小指を伸ばした形で「八」を示したが、その形が八と同形であることから数詞として用いた。
- 九 (𠄎)肘の形。九の数は小指1本を立てて表した。「紉」に「小」の義があって、「求牛」「紉牛」はいずれも「小牛」を意味する。「九」即ち「肘」の字を数詞に借りたのは小指を表示する音を借りた。
- 十 十は契文では丨、金文では◆のように肥点を加えて示した。針の形で肥点はその糸穴。「針」の古音はもと「ジフ」であったことが、「灌、汁、鍾」が音を異にしながら同義であることからわかる。十を表すには両手を合聚めて示した。針(ジフ)と聚(ジフ)が同音であるため、針の原字「十」を借りて数詞とした。
- 百 一と白の合字。白は𠄎のように書いて親指の象形。百は親指1本で表した。百とは一百の意で二百、三百、五百、六百などの契・金文はそれぞれ白字の上にその数を書いた。
- 千 (𠄎)人と一の合字。契・金文では二千、三千、四千、五千などは一字の部分に書きそえた。つまり千は、それ自体で「一千」の意。「千」は「人」字で表されたが、その数詞を腹の部分に書くところからすると腹で表したかも知れないという。
- 萬 (𠄎)さそりの象形。仮借とのみいって数詞に転用された理由は示されていない。

以上で他の文字に借りた四以上の数詞について、その転用の事情が知りうる。また、百と千について現代漢語では100, 1000, を数えるのに (yibǎi) (yiqiān) といって、漢字表記では「百」「千」のように一を添えるところが、日本語の100, 1000の称数法、表記と小異があるが、「百」「千」がそれ自体「一百」「一千」であったことの解説と結びつけて教えれば記憶の鮮明化に役立つであろう。

II-3 序数詞について

漢語の序数は「第一、第二」のように数詞に次第の第をつけ加えればよく、現代漢語も同じである。また数詞に何もつけず「一曰、二曰」として個条を示す表現も古くからある。英語にはfirst, second, thirdと言ひ、フランス語にpremier, second(e)(deuxieme), troisieme といひ、one, twoやun, deuxに由来しない序数が残っているが、「数と数字」ではこれを古代人が一や二を神聖視、特別視していたことの痕跡とみる。

「一」という数字は、ある古代人の場合には、他の数と区別されていました。古代のヘブライ語やアラビア語では、計算は二からはじめ、一は神だけにとっておかれしました。……ヨーロッパではゼロ(0)と(1)とは、数字とは呼ばれませんでした。それは、ゼロは数とはみなされず、一はあらゆる数の源泉で数そのものとは考えられなかったからです。……ある言語では、二もまた、他の数とは違うものとみなされました。……要するにこのことは、昔の人びとが、「第二の少年」と「二人の少年」とを関連づけなかったことを物語っています。人びとがこの関係を知って「第三」と「三」「第四」と「四」とを関連づけ始めたのは、人類がかなり発達してからのことでした。(「数と数字」P14~15)

こうした古代観念の痕跡をもたぬ「第一、第二」の序数詞を使っている中国でも、一や二、更に三を神聖視する観念はあった。それは一を全ての数の源泉という以上に、万物の源泉とみる思想であって、字源を解いたはずの「説文」も、一の字形とかかわらぬこの思想でそれを解いている。

- 一 惟初太極、道立於一、造分天地、化成萬物。(「説文解字」第一篇上)
- 二 地之數也。(同上、第十三篇下)
- 三 數名、天地人之道也。(同上、第一篇上) 注12)

とあるが、こうした字解を白川静氏は字の原義ではなく、時代思想による解釈とみて次のようにいわれる。

説解の文は〈淮南子、原道訓〉「道者一立萬物生矣」また〈易乾鑿度〉「孔子曰、易始於太極、太極分而爲二、故生天地」などによるものであろう。老子第四十二章の「道生一、一生二、二生三、三生萬物」という、道家の道と自然形成の関係を論じた思想がその背景をなしている。(「説文新義」卷一、P1)

ヘブライ語、アラビア語、ヨーロッパに見られた数の一二を神聖視する古代観念は、中国古代には已に「老子」「易」などに思想化されていた。その思想は数の解釈には影響を及ぼしたが、称数法などはその影響を受けなかった。それが今日の漢語の序数詞の整齊さとなっている。

「説文」は一から十までの数をすべてこうした「易」陰陽五行の思想で解いている。従って先に一～十の原義にみたように、「説文」は「八」にしかその原義を示し得なかった。また、first, second, は「太初」「それにつづくもの」の意であるが、漢語の序数詞として時に見える「初、次」「初、再」などはその発想に近いものであろう。

first [OE fyr(e)st (adj&adv); Cog. OHG fristo first / G fürst prince: 本来 fore の最上級]
second [ME seconde, F second, L secund(us) f. L sequi to follow]
(「Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary」)

初一日、五行、次二日敬用五事、次三日、農用八政、次四日、協用五紀；次五日、建用皇極、次六日、又用三德、次七日、明用稽疑、次八日、念用庶徵、次九日、嚮用五福、威用六極。(書洪範)

葵丘之會諸侯束牲載書而不歃血。初命曰：誅不孝，無易樹子，無以妾爲妻。再命曰：尊賢育才，以彰有德。三命曰：敬老慈功，無忘賓旅。(孟子、告子下)周法高「中國古代語法」P277～278

「書・洪範」の例は「初・次」に更に「一・二」が添えられているが、「初命・再命」は「最初に」「次に」の意で、first, secondの発想に通じる。また、この他、「春秋五始」の「元年・春・王・正月・公即位」は「元は気の始め、春は四時の始め、王は受命の始め、正月は政教の始め、公即位は一国の始め」(左伝隱公元年・正義)とされ、「元年・正月」も始めを神聖化しようとした漢語の特殊な序数であり、これは春秋以来現代日本語にも残っている。

その他、中国に特有の序数詞として、十干十二支の干支がある。これは殷墟出土の亀甲獣骨に已に六十干支の表があり、卜文ではその占卜の日を記して殆どがこの干支を記している。つまり、商代には日の順序を記すのに使われた。後に漢代には紀年、紀月、紀時と暦一般に使われるようになり、その暦法をとり入れた日本へも入り、高校生の国語便覧や古語辞典などにはその組織が示されている。これが中国語の純粋な序数詞であることについては、周法高「中国古代語法」に「漢語語法論」を引いている

用干支來紀日，甲骨、金文中都很常見。漢語語法論P338説：

中國的純粹序數其實就是干支。干支的發明本來是用以紀日，後來用以紀年、紀月、紀時。時、日、月、年都是時間的問題，而時候的特徵則于有順序。干支是用來紀年、紀月、紀日、紀時的，並不是用來計算時日的多少。換言之，他的用處是說明時日前後的順序，所以他根本是個序數的性質。(周法高「中國古代語法」P284)

また、十干が、紀日以外にも、律令の個条、帳簿の番号に「甲令・乙令・丙令」「甲帳」「乙帳」の様に使われた例も周法高「中国古代語法」(稱代篇・序数 P278)に示されている。

漢字の原義を説こうとした「説文」はその書を「一」の字解に始め、この十干十二支の字解

で閉じている。それによれば、十干を方位の消長、季節推移の次第、十二支を十二箇月にあてているが、その漢数字の字解と同じく、時代思潮の五行思想で解くもので、それは彼の思想を表している、商代に成立していた干支の組織を解き得ていない。郭沫若「釋干支」は、甲、乙、丙、丁を魚鱗、魚腸、魚尾、魚枕（耳石）で魚身の象形、戊・己・庚・辛・壬・癸は・戚（まさかり）惟繳（いぐるみ）鉦（樂器）劓劓（入れ墨用の針）鑿（石針）戣（三鋒矛）でいずれも戎器の象形とみ、基数の一三四が横畫で記され、五以上が仮借字として成立したのと対応して序数詞の二段階成立を見た。また、新城新蔵「東洋天文学史研究」の十二支を十二箇月とする説を批判し、バビロニア天文学の十二宮の伝播と見た。^(注13)その後文字学の深化はこの説を裏づけるようには進展せず、甲、乙、丙、丁を魚身の象形とみる見方は全面的に否定されている。むしろ、個々の字の解釈の深まりによって、干支の組織の由来は不明とされている。

全体トシテ十干ト十二支ノ音ガ何処カラ起ッタカハ全然判明シナイカラ、何故ニ甲乙丙丁及子丑寅ノ字ガ借用サレタカハ全然解ラナイ。（「漢字ノ起源二」P3）

十干の名にはそれぞれ意味の聯繫を求めるところがあるが、十二支のそれはいわば全く無記的であり、記號的である。音を以て字をえらんだとする他なく、十二の聖数をその名でよんだのであろう。（「説文新義」卷十四、P221）

その後、赤塚忠「甲骨文字干支」はその文字学的読み取りの上に、干支組織の由来、序数詞の側面を、十干—植物成長の次第、十二支—人間成長の次第として解釈を試みている。

甲は蔵しておくこと、乙は起きあがろうとすること、丙は横に広がること、丁はのびる、長大すること、戊は茂ること、盛大になること、己は始めをなすこと、庚は強固なること、辛は突き出ること、壬は充実すること、癸はひと区切りとなることであるならば、これは植物、特に大麦の類が甲で種子を地中に蔵し、乙で地中に根を生い、丙で地上に双葉を出し、丁で茎が伸び、戊で葉が茂り、己で実を結ぶ新たな営みをはじめて花が付き、茎や葉や新実が庚で固々しくなり、辛で一般に草木ならば新しい小枝を突き出し、大麦ならば芒を鋭くつき出し、壬で新実が充実し、ここで癸で植物、特に大麦の成長活動が一段落することをいっているのに相違ない。^(注14)

十二支は、人の生霊が母の胎内に宿り、胎児が成長成熟して、ついに 児としてその名を得るまでの経過にとって組織されていると考えられる。この経過は現代の知識もほぼ合致しよう。^(注15)

こうした発生論的見方が甲骨文研究の上に成り立つならば、「史記・律書」、劉熙「釋名」、許慎「説文」の干支の捉え方や、五行思想を生む根が干支の組織それ自体にあったことになる。その意味で、字形の確定から、干支の組織・伝統思想の発生と変化を跡づける興味深い説と思う。

Ⅲ 月の名と週日の名

Ⅲ-1 時間詞「年・月・日」の語源

日夜の循環を区切りとして日を数え、月の満ち欠けによって月を数え、日月の運行によって年を数えたのは、人類四大文明いずれにも共通することである。従って何語であれ、年・月・日の語はその語源は相い似たもので、ことあらためてそれをいう必要もない自明の事として私達はその語を使っている。

漢語の「月・日」が天体としての太陰・太陽の象形字であり、時間詞として両用されていること、和語の「つき・ひ」も天体名と時間詞に両用されていることは説明を要しない。さればこそ、私達は漢語「年・月・日」に「とし・つき・ひ」の訓を与えてもきたのであった。ただ、「年」と「とし」については少々説明があるかも知れない。「年」は「稔」の原字であって、一年、二年は一稔、二稔の意で、稔は年がもっぱら年歳の意になってから別に作られた。^(注16) 和語「とし」の語源も同じ所にある。

とし [年・歳] 《稲などのみのりの意、一回のみのりに一年かかるところから。後に年の意。漢字「年」も穀物の熟する意》「我が欲りし雨は降りきぬかくしあれば言挙げせずとも一は栄えむ」〈万四一四〉(岩波「古語辞典」)^{注17)}

更に英語の year, month, day, をみると、month が moon に由来すること、day は漢語や和語のように直接 sun には関連しないが、day-night と対比すれば、「日夜」の日、「ひるよる」の「ひる」に当る語であることがわかる。

day 2) D-【ギリシャ神話】昼の神 (Nyxの子) [OE dæg; Cog. G tag / Du, Dan & Swed. Dag] (「Kenkyusya's New English-Japanese Dictionary」)

Tag [原義 helle Zeit; engl day] (明るい時間) (木村謹治・相良守峯・獨和辞典)^{注18)}
year は太陽の運行を意味し、「年」「とし」とは異なるが、漢語の年歳の歳の方がそれにあたる。

year [OE gēar; Cog. Du jaar / G jahr] Jahr [原義 Gang [del Sonne]] (日の歩行) (前掲「Kenkyusya's New English-Japanese Dictionary」及び「獨和辞典」)

このように天体の運行と自然の推移という普遍的な事実から生まれた語彙はそれぞれの語族間で相似た語で表されていたのはむしろ当然であった。とすれば、月の名、週日の名はどうなっているのだろうか。

Ⅲ-2 月の名

漢語が月の名を一月、二月、三月…十二月と称したのは商代以来のこと、殷墟甲骨文は例外なくこの名で表示している。日の順序を表すのに干支という序数詞を工夫した商の人々も、月の順序は基数としての一二三…十二を序数詞として両用していた。漢代になって十二支で月を表示することも並行的に行なわれたが、現代漢語までこの月の名が続いて来た。それが

中古漢語の時代に日本に伝わって、和語の月の名は、その称数法と同じく現代では姿を消してしまった。

むつき、きざらぎ、やよひ、うづき、さつき、みなづき、ふみづき、はつき、ながつき、かみなづき、しもつき、しはすの称は中国暦伝来以前の自然暦段階に生れた月の名と思う。「時代別国語辞典 上代篇」の「干支・月名について」では、平安時代の月の呼び名が上代に溯ることを示しつつ、

語源についても諸説あるが、多くは不明というほかない(注19)と言っているが、「岩波古語辞典」はそのうち、やよひ、さつき、みなつき、かみなづきについては次のように言う。

やよひ (イヤホイの転と言う)

さつき (サは神稲。稲を植える月の意)

みなつき (ミは水、ナは連体助詞。田に水を湛える月の意か)

かみなづき (もと「神の月」の意か。ナは連体助詞であったが、平安時代になると一般に使われなくなったので、無シのナと思われ「神無月」の俗説を生じたか)

その漢字表記と語源説が一致している弥生(イヤオヒ)や、明示的な霜月(しもつき)などからして、それが自然暦、農事暦的な呼び名であったろうから、「さつき」「みなつき」に対する解釈の方向は支持されると思う。他に「日本語の語源一角川小辞典10」(注20)の解釈はその自然暦、農事暦の方向に添ったものとして興味もてる。

- 如 月 陰暦二月は草焼きの季節であったので(草焼き)月といった。ヤが子交 [jr] をとげてクサラキに転音し、語頭の母交でキサラギ(如月)に変化した。(P25)
- 弥 生 草木がいよいよ茂ることをイヤオヒ(弥生)といったのが、ヤオヒ、ヤヨヒ(陰暦三月の異称になった。-「j」の添加例 (P408)
- 卯 月 幹が中空であるところからウツロギ(空木)といったのがウヅキ(空木)になった。初夏、白い鐘の形の花がむらがり咲く。それをウツキノハナ(空木の花)と呼んだのが、ウノハナ(卯の花)と省略された。陰暦四月をウノハナヅキ(卯の花月)といったのがウヅキ(卯月)になった。-多数音節脱落の例 (P289)
- 早 月 早苗を植える陰暦五月をサナヘヅキ(早苗月)、略称してサツキ(早月)という。三十日間降り続くサミダレ(五月雨)のことをサツキフリともいった。(P26)
- 水無月 ミノソコ(水の底)をミナソコ。ミノツキ(水の月)をミナヅキ(水無月) - 発音強化による [o a] の母交の例。
- 文 月 [糶ガ稲ヲ] フクミヅキ(含み月) - フミヅキ(文月)・フヅキ(陰暦七月の異称) - 音節脱落の例 (P276)
- 葉 月 ハチヅキ(八月) - ハヅキ(葉月) (P273)
- 長 月 ヨナガツキ(夜長月) - ナガツキ(長月・陰暦九月の異名) (P279)
- 神無月 カミナシヅキ(醸み成し月) - カンナヅキ(神無月) (P322)
- 師 走 トシハツル(年果つる)月は、その省略形のシハツがシハス(師走・十二月)・

シワスになった。(P91)

この解によれば葉月だけは数から説明されているが、全体として自然暦、農事暦的季節循環に立ってつけられたのが和語の月の名であった。こうした自然暦、農事暦的発想で月の呼び名をつけたものとしては、後にフランス共和暦があるが、この発想の古いものが日本の月の名であった。

漢語のように序数詞で呼ぶ月の名はないかと求めてみるとローマ暦第5月以下第10月までがそれである。

渡邊敏夫「暦のすべて」^(注21)にいう。

世紀前八世紀、ロムルス (Romulus) 王時代、一年を三〇四日とし、十箇月から成る暦が用いられた。その月名と日数は第9表のようである。

ローマ暦の一年は、太陰月によったものであろうが、一年を三〇四日としたことは暦法上まったく意義のないことである。ロムルスがローマ市を建設したのは、世紀前七五三年で、この年をローマ紀元元年とする。

ロムルスの後継者ヌマ・ポンピリウス (Numa Pompilius) はロムルス暦の不備を補った。第十一月ヤヌアリウス二十九日、第十二月フェブルリウス二十八日の二箇月を年末に付加して、一年十二箇月、三五五日とした。年は春分を含む春に始まる。(P51~52)

そしてこれが西洋諸語の月の名のもととなった。その事情を見るために渡邊敏夫氏作製の暦の対称表の一部を示しておこう。^(注22)

月の 順序	ローマ暦		ユリウス暦		フランス共和暦		日本暦
	月名(現行暦の月)	ロムルスヌマ	月名	ユリウス アウグス トゥス	月名	(現行暦の月)	月名
第1月	Martius (3月)	31日 31日	Januarius (January)	31日 31日	vendemiaire (9~10月)	30日	むつき 睦月
第2月	Aprilis (4月)	30 29	Februarius (February)	29(30) 28(29)	brumaire (10~11月)	30	きさらぎ 如月
第3月	Maius (5月)	31 31	Martius (March)	31 31	frimaire (11~12月)	30	やよい 弥生
第4月	Junius (6月)	30 29	Aprilis (April)	30 30	nivôse (12~1月)	30	うづき 卯月
第5月	Quintilis (7月)	31 31	Maius (May)	31 31	pluviôse (1~2月)	30	さつき 皐月
第6月	Sextilis (8月)	30 29	Junius (June)	30 30	ventose (2~3月)	30	みなづき 水無月
第7月	Septembris (9月)	30 29	Quintilis/Julius (July)	31 31	germinal (3~4月)	30	かみづき 文月
第8月	Octobris (10月)	31 31	Sextilis/Augustus (August)	30 31	floréal (4~5月)	30	はづき 葉月
第9月	Novembris (11月)	30 29	Septembris (September)	31 30	prairial (5~6月)	30	ながつき 長月
第10月	Decembris (12月)	30 29	Octobris (October)	30 31	messidor (6~7月)	30	かなづき 神無月
第11月	Januarius (1月)	— 29	Novembris (November)	31 30	thermidor (7~8月)	30	しもつき 霜月
第12月	Februarius (2月)	— 28	Decembris (December)	30 31	fructidor (8~9月)	30	しわす 師走
1年の日数	304	355	365(366)	365(366)	365(366)		

ロムルス暦の第5月以降はLatin語のQuint 5, Sex 6, Sept 7, Octo 8, Novem 9, Decem 10, の序数詞の形で、漢語の月の名と発想を同じくしている。その第1月から第4月は序数詞ではなく、神の名等が名づけられているが、その語源説をみると神話による農事暦の痕跡が濃い。「Encyclopedia Americana」の語源説のMarch以下の部分に見えているそれを引こう。

MARCH It is named for mars , the Roman god of war and originally , of Vegetation. In ancient Rome , March was the first month , making renewal of agriculture and of military campaign.

APRIL Called Aprilis in the Roman Calender (in which it was the second month), it probably derived its name from the Latin verb aperire (to open), indicating the seson of the year when the buds begin to open.

MAY It is named for Maia , an early Roman goddess of spring , to whom sacrifices were made toward ensuring a bountiful harvest.

JUNE The name came into English from LATIN , possibly from the word juniores (“youths”) on the ground that this month once honored the young. (注23)

Aprilis には別に「aper“wildboar”」「ギリシャ語のAphros, Aphrodite (愛の神) の語根」 「Vedic paras (following)」の可能性も示されている。またJuniusにも別に「Juno (ジュピターの妻、女性の結婚の守護神)」「Junius (ローマ貴族の名)」の説も紹介されている。

Martius, Maiusは明らかに神話による農事暦の発想であり、AprilisをAprodite, Junoと解く見方は生命発生論的神話の痕跡のようにも見える。数の1・2を神聖視したように春の始まり・生命の始まりを神聖視する古代観念の混在がロムルス暦の第1月～第4月の名であり、第5月以下は客観的序数詞の名であった。それは殷人の暦のように実用的なものではなく、その不足分に両面神Januarius, 清浄神Februariusの二箇月をつけ加えたのが、ヌマの改定であった。その後ユリウスの太陽暦採用の際にJanuariusを年初として、現在の西洋諸語の月の名が定まった。その際、Quintilisは暦法の制定者Juliusに捧げられ、またアウグトウスの改暦にはSextilisがAugustusに捧げられ、序数詞名の月の名は、二月ずれて九月～一二月に残ることになった。これらと漢語のそれに対比してみるとあらためて漢語のそのの整齐簡潔を感じないであろうか。

Ⅲ-3 週日の名

現代漢語の週日の名は、これもその数詞を序数詞として用いた整齐簡潔な形「星期一、星期二、星期三、星期四、星期五、星期六、星期天 (星期日)」である。生活を七日週期に区切るということは、中国にも、その暦法を輸入した日本にもないことであった。十日一句ごとに占トを行なった殷人以来、一月を上旬、中旬、下旬と10日区切りとしたり、ついたち、十五日を休みとしたり、十五日、みそか勘定のように一月を二分したりする週期が行なわれていた。明治維新、辛亥革命後、それぞれ従来の太陰太陽暦を太陽暦に改めたことによって、この七日週期が生活上に取り入れられることになった。ただこのバビロニア起源の七曜週期は中国にも早く入っており、生活上の週期としては使われなかったが、「日月火水木金土」は古くから暦に記載され、占いなどには使われていたという。

七曜暦 以日、月和五星纪日的历法。我国通行顺序为日、月、火、水、木、金、土、周而复始。始于古代巴比伦，(一説始于古代埃及) 我国四世纪时曾有此法。八世纪时摩尼教徒由中亚康国传入我国。《新唐书艺文志三》載有吴伯善《陈七曜历》五卷。敦煌发现的历书和占星术著作亦有用七曜历者。(「漢語大詞典」卷一) 注24)

日本に七曜が入ってきたのは、空海(弘法大師)が伝来したといわれる『宿曜経』によるとされる。暦に記載されるようになったのは十世紀末頃からで、それ以後の暦には、毎日に七曜が記されている。一中略一明治六年改暦して太陽暦を採用すると万事西洋流となるにつれ、週も市民生活に影響をもつようになり、明治九年三月十二日太政官達第二十七

号により、

従前十六日休暇の處来る四月より日曜日を以て休暇と被定候條此旨相違候事
と達しがあり、公務には日曜日が休日となった。〔「暦のすべて」P35〕

従って日本人の現在使っている週日の名は漢語の七曜名を新暦採用の際に踏襲したのであって、太陽暦から新に訳語を工夫したわけではなかった。その後1912年に太陽暦を採用した中国は、七曜名に変えて新に「星期一」以下の序数詞名を採用したのである。

バビロニア起源とは別に、「旧約聖書」の天地創造神話によって、七日週期を用いたユダヤ暦では、七曜名を使わず、

第1日、第2日と順に数えて終わりの七日をサバット (Sabbat) と呼んで休日とした。
〔「暦のすべて」P31〕

という。中国人はその改暦にあたってこの方式を採用した。民国の民間暦を見ると確かに現在使用している「星期一、星期二…」と記されているが、現代漢語には教会起源の「禮拜一、禮拜二、禮拜三……禮拜天(禮拜日)」の呼称も残っている。

七曜暦伝来の頃には既に中国的宇宙観としての陰陽五行思想が成立していて、七曜の五惑星は、五行に相当する火星、水星、木星、金星、土星の名で呼ばれており、日・月は太陰・太陽とも呼ばれていた。従って七曜は「日・月・火・水・木・金・土」となった。一方バビロニアのそれ、ヨーロッパ諸語では五惑星はそれぞれ神話の神にあてられていてそれが使われている。私達が英語の習い始めに、Sunday, Mondayはすぐ理解できてもTuesday以下にとまどうのは、英語の歴史を反影して火曜以下金曜までは、現在の英語の惑星名とは違ったチュートン族の惑星名が残ったためである。渡邊敏夫「暦のすべて」にある七曜名対照表を引用させていただく。

Tiu, Woden, Thor, Freya, はチュートン族の神話で、Mars, Mercury, Jupiter, Venusにあたる神である。

七曜名	ラテン名	英名	サクソン名
日曜日	Dies Solis	Sunday	Sun' day
月曜日	Dies Lunae	Monday	Moon's day
火曜日	Dies Martis	Tuesday	Tiu's day
水曜日	Dies Mercurii	Wednesday	Woden' day
木曜日	Dies Jovis	Thursday	Thor's day
金曜日	Dies Veneris	Friday	Freya's day
土曜日	Dies Satumi	Saturday	Sateme's day

〔「暦のすべて」p32〕

以上で私達が日常使っている漢語の七曜名、英語のそれ、現代漢語の序数詞呼称が如何にその根底を共通にしつつ、差異的に現われているか示されると思う。

注

- 注1 藤堂明保編「学研漢和大事典」学習研究社 昭和61年
- 注2 萩谷ト著「土佐日記全注釈」角川書店 昭和42年 P51
- 注3 倉野憲司校注「古事記」日本古典文学大系1 岩波書店 昭和33年
- 注4 周法高著「中国古代語法・稱代篇」中央研究院歴史語言研究專刊之三十九台聯國風出版社民國 '61 P261 に数詞としての「壹・參」の使用は秦代に「陸・漆・柒」の原字が漢代に見られ、唐代には「肆・伍・玖・拾・伯・佰・阡」がそろって流行したことが示されている。
- 注5 坂本太郎他校注「日本書紀」日本古典文学大系67 岩波書店 昭和42年 P107。数詞につく日本語の「つ」は漢語の「箇」に当る。現代漢語では簡略な異体字「个」が使われるが、日本の皿盛りの果物などに「三ヶ百円」などとみられるのはこの「个」の筆写体。
- 注6 岩崎民平、河村重治郎編「Kenkyusya's New English-Japanese Dictionary」研究社 '60
- 注7 D・E・スミス、J・ギンズパーク著、平田寛訳「数と数字」世界教養全集30平凡社 '63 P17~18
- 注8 丁山著「數名古証」歴史語言研究所集刊一ノ一 中華書局 '87 P94
- 注9 郭沫若著「釋五十」「甲骨文字研究」所収 中華書局 '76 P111~112
- 注10 加藤常賢著「漢字ノ起源(一)」斯文会 昭和35年 P1
- 注11 白川静著「説文新義」卷一 五典書院 昭和45年 P4~5
- 注12 段玉裁注、索引本「説文解字注」中文出版社 '71
- 注13 郭沫若著「釋五十」「甲骨文字研究」所収 中華書局 '76
- 注14 赤塚忠著「甲骨干支文字」赤塚忠著作集七「甲骨金文研究」研文社 '89 P269
- 注15 赤塚忠著「甲骨干支文字」赤塚忠著作集七「甲骨金文研究」研文社 '89 P281
- 注16 加藤常賢著「漢字の起源」角川書店 昭和46年 P749
- 注17 大野晋他編「岩波古語辞典」岩波書店 '79
- 注18 木村謹治、相良守峯著「獨和辞典」博友社 昭和26年
- 注19 上代語辞典編修委員会編「時代別国語大辞典 上代篇」三省堂 '89
- 注20 田井信之著「日本語の語源」角川小辞典ニ10 角川書店 昭和54年
- 注21 渡邊敏夫著「暦のすべて—その歴史と文化」カルチャーブックス35 雄山閣
- 注22 「日本大百科全書」小学館 昭和59年 暦の項に渡邊敏夫氏作成の対照表がある。
- 注23 「The Encyclopedia Americana International Edition」Grolier Incorporated '86
- 注24 羅竹風主編「漢語大詞典」卷一 上海辞書出版社 '86 P167